

1 主題構成表

主題名「郷土愛」(中学校・第3学年) 資料名「美濃和紙と共に ～藤田一夫翁の半生から～」(藤田 一夫)

<p>■ 内容項目 C (16) 「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」 郷土の伝統と文化を大切に社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。</p>	<p>■ 内容項目から見た生徒の実態 (意識)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科等の授業において、郷土の発展に尽くしてきた人々について学習し、理解と尊敬の念をもつことができつつある。 ・伝統や文化を継承する人々の思いに触れ、地域での行事やボランティア活動に積極的に参加しようとする生徒が増えてきている。 ・地域の伝統や文化等が自分を育ててくれたという自覚や、それらを生み出した先人への尊敬や感謝の念をもち、それを伝承し、持続・発展させようとする姿勢には弱さがある。 <p>(要因)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己中心的な考えから、自分だけで存在していると考えがちである。 ・社会や生活環境の変化から、伝統や文化に触れる機会が減少してきており、地域全体として、郷土への思いが薄れてきている。 ・学校や家庭において、地域を見つめ、自分と関係付けて考えたりよさを感じたりする機会が少ない。 ・地域社会の一員であるという自覚が十分に育っていない。 	<p>■ 資料の分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・紙漉きの家に生まれた藤田翁が、祖父や父から紙漉きの方法を教わり、自分で紙を漉くようになる中で、美濃和紙の技術や精神を後世に残したいという思いで学び続けるとともに、美濃和紙の行く末を心配する姿が描かれており、藤田翁の気持ちを考えながら、地域の一員としての自覚を高め、自己の生き方を考えることができる資料である。 ・かなり難しい修行にもかかわらず、一度もやめたいと思わずに紙漉きに打ち込んできたのは、藤田翁の美濃和紙への強い思いがあることをとらえたい。 ・八十歳になる藤田翁の美濃和紙の行く末を心配する姿から、地域の若者たちに対して、文化を守り発展させていって欲しいという願いがあることを捉えて、自分自身の地域との関わりを見つめ直すことができる。
<p>■ ねらい 郷土の伝統や文化を守るには、時代の変化の中でも大切にすべき技術や精神を引き継いできた先人の苦労や努力に学ぶことが大切であることに気付き、自分も地域の一員としてできることを考え、更なる郷土の発展に努めていこうとする意欲を育てる。</p>		
<p>■ 展開の構想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主人公の美濃和紙への強い思いと郷土への愛情が美濃和紙を前向きに勉強する姿に繋がっていることに気付くことができるようにする。 ・先人から受け継ぎ、自分の生涯をかけて守ってきた美濃和紙が、この地域で生き続けることを願う主人公の気持ちを深める。 ・藤田翁への尊敬や感謝の念を膨らませることにより、主体的に郷土の発展に努めていきたいという気持ちをもつことができるようにする。 ・地域社会の一員として、その発展を具体的に描き、自ら進んで関わっていけるようにする。 	<p>■ 基本発問 (◎中心発問)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○藤田翁が七十年近く「やめたい」と思うことなく紙を漉いてくることができたのは、どうしてだろう。 ◎藤田翁が「美濃和紙の行く末を見定めるまでは、しばらく死ねん」という思いを抱くのは、どんな気持ちからだろう。 ○自分の引き継いできたものを次世代に残したいと願いながら郷土に尽くす藤田翁の生き方から学べることは何だろう。 ○自分の郷土の発展をどのように思い描きますか。そのために踏み出せる一歩を考えよう。 	
<p>■ 「私たちの道徳」の活用 (授業前 ・ 授業中 ・ <u>授業後</u> ・ 活用しない) (活用の仕方) P 201、204を読み、郷土へ主体的に関わっていきたいという気持ちを高める。</p>		

2 学習指導過程

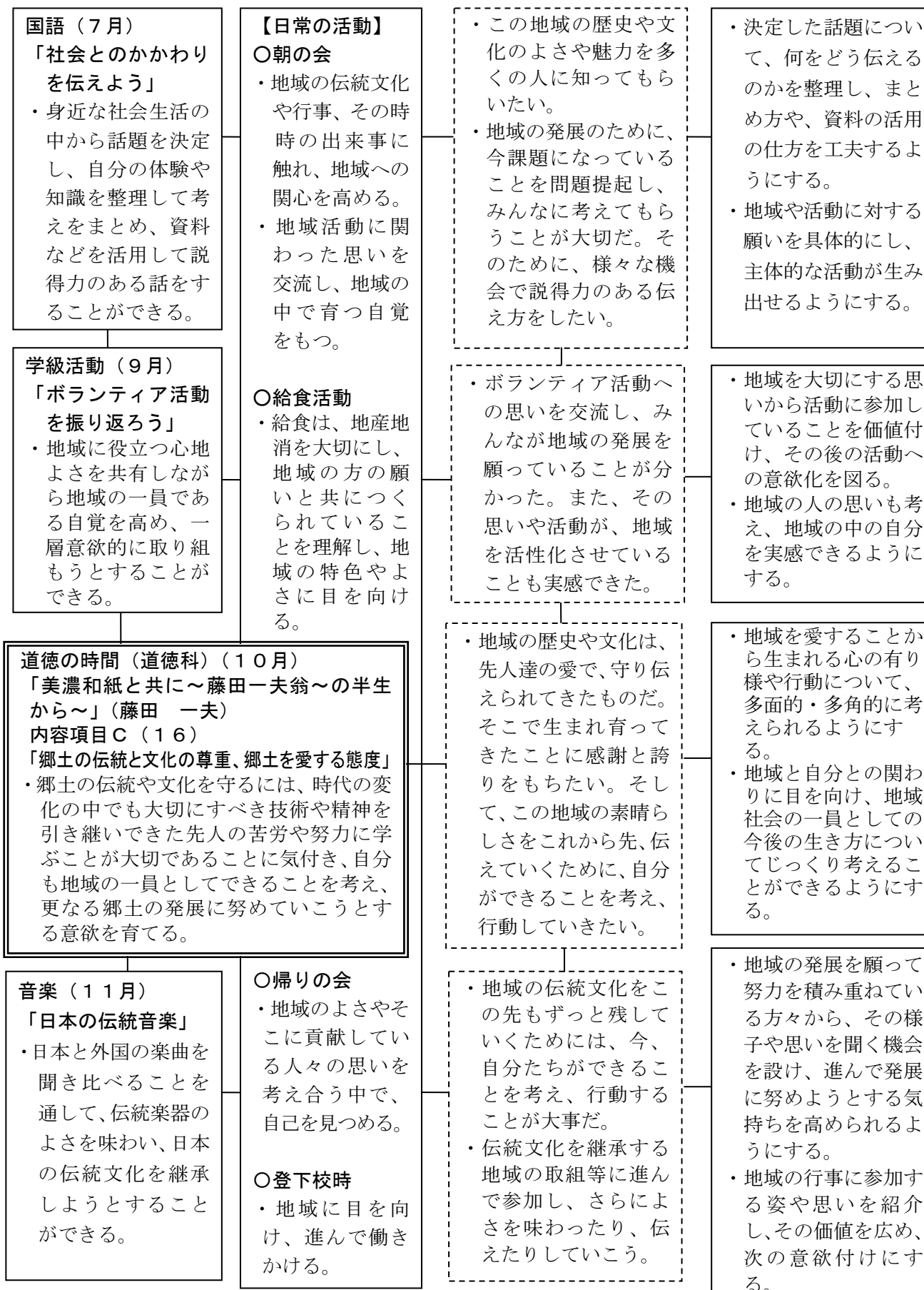
	基本発問と予想される生徒の反応	指導・援助
導入	◇美濃和紙職人「藤田一夫」さんを紹介し、資料への興味・関心を高める。 ・美濃市片知出身で、美濃和紙の発展に努めてきた人だ。	・藤田一夫翁の生き方を通して、自分と地域との関わり方について考えることをおさえる。
展開前段	◇資料提示をする。 ○感想を交流する。 ・修行はかなり難しかったのに、一度もやめたいと思わず、勉強をし続ける藤田さんはすごいと思う。 ・お金を儲けるのではなく、美濃和紙の技術や精神を残したいという藤田さんの考え方はすごいと思う。 ・「美濃和紙の行く末を見定めたい」と、先のことまで心配できるのは、郷土を大切に思う心があるからだ。 ・美濃和紙が世界無形文化遺産に登録されたのは、藤田さん達が大切に守ってくれたからだ。誇りに思う。 ○藤田翁が七十年近く「やめたい」と思うことなく紙を漉いてくることができたのは、どうしてだろう。 ・紙を漉くほど上手になっていくのが嬉しく、楽しい。 ・理屈とか科学ではなく、実感で身に付けて作った和紙こそが本物で、その技術を伝えていきたいから。 ・紙は、漉く人のその時の心を映し出すから、この技術を残すには、どんなときも紙の繊維を納める心と技術を身に付けることが必要だと思っているから。 ・尾張の殿様に献上する紙を漉くようなすばらしい美濃の伝統文化を、この地域に残していきたいから。 ◎藤田翁が「美濃和紙の行く末を見定めるまでは、しばらく死ねん」という思いを抱くのは、どんな気持ちからだろう。 ・この美しい美濃和紙が絶えてしまうことがあったらつらい。受け継がれていくのを見届けたい。 ・美濃和紙のよさを見極める人がいなくなっている。何とかして、本物の美濃和紙を残していきたい。 ・千三百年生き続ける和紙を作ることができる技術や精神を絶やしてはいけない。 ・美濃和紙は、美濃の美しい豊かな水でしか作れない和紙だからこそ、この地域で生き続けてほしい。 ・この土地を心から愛している。この郷土が守られ、発展していくことを願っている。 ○自分が引き継いできたものを次世代に残したいと願いながら郷土に尽くす藤田翁の生き方から学べることは何だろう。(ペア交流) ・目先の利益ではなく、大切なことを見極めてこだわっていくことが、伝統や文化を守っていくことになる。 ・郷土を愛する心が、優れた伝統や文化を生み出し、発展させていくことができることが分かった。自分も、もっと郷土に目を向け、できることを考えたい。 ・郷土の伝統や文化を守るために尽くし、自分の人生を大切に生きてきた先人達のおかげで今の郷土、生活があることが分かった。自分も大切にしたい。	・自然豊かできれいな水のある片知の様子分かる補足資料を提示する。 ・「すごい」という発言に対しては、その理由を問いて見方や考え方を明らかにし、自己理解を促す。 ・感想を交流する中で、藤田翁の生き方を整理するとともに、藤田翁の考え方についてどう思うか問うことで、自分自身と関わらせ、本時深めたい道徳的価値について課題意識をもつことができるようにする。 ・「修行はかなり難しかったのではないか」と問い、「家の後を継ぐ」という気持ちだけでなく、藤田翁自身が美濃和紙の魅力に惹かれて前向きに学び続け、それが後世に残したいという強い思いにつながっていることに気付くことができるようにする。 ・藤田翁の美濃和紙や郷土への愛情の深さを捉えさせると共に、自分の郷土への気持ちを思い起こすことができるようにする。 ・先人から受け継ぎ、自分の生涯をかけて守ってきた美濃和紙が、これからもこの地域で生き続け、ここに生きる人たちの誇りになっていくことを願う主人公の気持ちを深める。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">【深めの発問】 ★藤田翁は郷土「美濃」に対してどんな思いや願いを抱いているのだろう。</div> ・美濃和紙を守るということについての藤田さんの思いや願いを多面的・多角的に考えることができるようにする。 ・自分と関わらせながら藤田翁の生き方について考えたり、藤田翁の生き方から今後の自分の生き方を考えていたりしている発言を価値付ける。 ・藤田翁への尊敬や感謝の念を膨らませることにより、主体的に郷土の発展に努めていきたいという気持ちをもつことができるようにする。
展開後段	○自分の郷土の発展をどのように描くだろう。そのために踏み出せる一歩を考えよう。 ・毎年行われる「あかりアート展」では、大勢の人が集い、その灯火に心を癒やしてほしい。そのために、願いを込めた作品づくりはもちろん、美しい町作りのためのボランティア活動にも進んで参加したい。	・自分の地域の伝統や文化について、具体的に思い起こし、広く捉えることができるようにする。 ・地域社会の一員として、その発展を具体的に描き、自ら進んで関わっていきけるようにする。
終末	◇教師の説話を聞く。	<生徒の変容の見届け> ・「地域の伝統や文化を守っていくために、自分ができることを、進んで見つけてやっていきたい」など、自分の生活を振り返りながら郷土への思いを深めている。

3 道徳の時間（道徳科）と他の教育活動との関連

<場の内容・ねらい>

<生徒の意識>

<指導・援助>



美濃和紙と共に

（藤田一夫翁^{おち}の半生から）

わしは、岐阜県の山の中、美濃市^{かたじ}片知、天人が住むような高いところに住んでおる。

大正四年（一九一五年）十一月三日、紙漉^{かみす}きの家に生まれた。

おじいさんの代は夏場は百姓をして、冬の農閑期に紙を漉いておった。おじいさんの話を聞いていて、一番記憶に残っておるのは、昔は尾張侯の紙を漉いておったということでの。そのころは、なんでも一生に一度は伊勢参りに行くというふうで、娘を連れて伊勢に行った。そのとき美濃の渡しで、船頭が娘をからかったそう。おじいさんが、「尾張の紙を漉くものに何事だ」と言ったら、船頭が体を震わせて恐れ入ったと言うことじや。長良川を治める尾張の殿様の紙を漉く人かと、びつくりしたらしい。山の中の紙漉きじやったが、おじいさんは胸を張って生きておったじやらあな。

その後を親父が継いでやっておったが、親父のころは紙を夏場もやっておった。ただ、問題は夏場はトロロアオイが出んでなあ。ノリウツギで漉いておった。試験場がクレゾール^{せつけんえき}石鹼液でトロロアオイを貯蔵する方法を考案して、夏でも出来るようになった。昭和十年前後、その頃からやな、美濃に専属の紙が多くなるのは。というのは、百姓では飯を食えない場所やし、うちのおじいさんは粟^{あわ}や稗^{ひえ}ぐらいが主食やったから、生活が豊かになって米の飯が食いたい、そのためには、年中紙を漉いてそれを売っていくしか手がないということじやったげな。片知も蔵生^{わらび}も、美濃全体がそういうふうじやった。

わしは、高等小学校を卒業すると、紙を漉くようになった。試験場へ習いに行くものもおったが、わしは家で親父から教えてもらった。昔は、習いの時は、誰でも背中から体を接して手を添えて教わったもんじや。じやが、親父は体が小さくて、わしは体が大きいから、それが出来ん。で、親父は横に立っておつて、説明するだ

けじゃった。わしの場合、修行はかなり難しかったのう。それに二十歳前後は、谷戸の新宮さんを訪ねて古い文書を見せてもらったり、あれこれと調べたもんやった。

おじいさんは、七十三で亡くなったが、チリ取りはおじいさんに教わっておる。蕨生のように川の流れのなかでチリ取りができる場所は紙がきれいにできるんじゃないけれども、わしのところのように溜め水でやらんならん所はそんな訳にはいかん。きれいな紙を作りたい一心で、わしはおじいさんに教わった西国三十三番の御詠歌を歌いながら、あれこれ工夫してやったもんじゃ。

昔は、同じ美濃でも水質によつて漉く紙が違つておつたし、世の中の好み、扱う人が変わることで、随分変わつてきたもんじゃ。片知でいうとな、親父の代までは、坂下紙という赤みのある田舎障子を漉いておつたが、そのうち、美濃書院という高級な物に発展していく書院紙を漉くようになっていった。それには、いろいろな有利な条件があつたが、やはり一番は、川の水が豊富で、しかも自然の湧き水にも恵まれ、自然漂白やチリ取りができたということじゃ。わしは、全国をまわつて紙の研究をしてきたが、紙にとつて、水は大切な鍵じゃ。全国どんな紙の産地も、絶対長良川の水で漉いた障子紙はまねできん。日本中歩いて、紙を漉くところで長良川ほどきれいな水は、まず無いねえ。

このころ、大学を出た孫が、「おじいさん、おれも『紙』やつてみたい」と言うようになった。わしは、孫にこうやつて言つてやった。「それやるんなら、時代の流れが違つとるで、紙というものはどんなふうにするものか、機械製紙へ入つて、二年ほど現場を見てこい。手漉きは、お父さんとお母さんがやつておるから、じっくり見てきた目で、それから勉強していけば良い」と。

わしは、人間一生勉強やと思つとる。わしやあ、ごまかしが嫌いな性分やで、とにかくにせものは作らん。最後は誰かが分かるじやろう。いつとき金を儲けるのではなくして、いかにして美濃の紙、美濃和紙の技術、精神を残していくかということを考えておる。

この前、アメリカへ国宝展に招かれて行つたとき、会館の館長が、千三百年の伝

統を持って今なお生きておる和紙があることに驚いたと言っておった。今、マシンペーパーだと百年で酸化してボロボロになってしまう。千三百年生きておるこの和紙と同じものを作るべきじゃないかと言われた。ありがたい言葉じゃ、と聞きながら、わしは少々銭がかかっても、国として残すべき書類は手の楮こうその和紙で残してもらいたいと思った。

こんで、七十年近く紙を漉いてきたが、いっぺんもやめたいと思ったことはなかったのう。『紙』をやるのでもなんでも、結局、基本を大事にしていかなきゃならん、科学じゃなくて実感で。特に手でやるものはそういうことが大事だと、わしは思う。長い間やっているうちには、いつの間にか身についとつたり、ふつと見えてきたりすることがある。紙はのう、漉く人の心を映すんやな。けんかした後に漉いた紙はあかん。正直なもんでそんな時は、紙の繊維をようおさめれえへん。ほうやで、紙を漉くときは、とにかく一生懸命でなけな……。

ええ紙はなあ、「一枚いくら」で頼んだら絶対出来んぞ。いくらで注文を受けたら、人つちゆうもんは、「一時間にどれだけ漉く」という計算をするからダメやな。そんでは、ホントの紙はできん。だから、わしに言わせたら、ホントの紙を見る人が欲しいのう。紙の良さを見る人を……。

もうすぐ八十じゃが、美濃和紙の行く末を見定めるまでは、わしは、しばらく死ねん。そう、思つとる。

美濃北中学校作（平成五年八月）

（注）トロロアオイ…楮などの原料の繊維を水の中にまんべんなく行き渡らせる
とろみのある汁を出す植物